

平成30年度 第1回桑名市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成30年10月15日（月）
開会 10時00分 閉会 11時20分

2. 開催場所 桑名市役所3階第2会議室

3. 出席構成員

桑名市長 伊藤 徳宇
桑名市教育委員会
教育長 近藤 久郎
委員 松岡 守
委員 稲垣 陽子
委員 安藤 智里
委員 佐藤 強
委員 松香 洋子

4. 構成員以外の出席者

(総務部)

総務部長 平野 勝弘
総務課長 日佐 龍雄
総務係長 水谷 圭司

(教育委員会事務局)

教育部長 南川 恒司
教育監兼学校支援課長 高木 達成
教育総務課長 山下 範昭
教育委員会政策監 山口 雄二
教育総務課管理係長 吉田 歩

(説明員)

防災指導監 藤井 一隆

5. 議 題 (1) 防災について
①教育現場における防災のあり方について
(2) その他

【総務部長】

おはようございます。

定刻まで少しお時間がありますけれども、先に傍聴者の関係をお諮りしたいと思います。本日の会議について、非公開とすべき案件はございませんので、現在、今、希望者はございませんが、傍聴希望者がありましたら傍聴人の入室を許可したいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【総務部長】

それでは、おそろいですので、よろしいですか。

【市長】

良いのではないのでしょうか。

【総務部長】

では、ただいまから平成30年度の第1回桑名市総合教育会議を開催いたします。

本年度第1回目の会議では、防災についてご協議いただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

ここからは市長に会議の進行をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

【市長】

おはようございます。

では、ここから議題に入らせていただきます。よろしく願いします。

事項の1、防災について、①教育現場における防災のあり方について議題としたいというふうに思います。

今年は災害の被害が大変多い1年でありますけれども、この教育現場において防災はどうやって扱うのがいいのかというようなことをご議論いただければというふうに思っています。

本日は、防災危機管理課から藤井防災指導監に来てもらっています。この防災指導監は自衛隊のOBでありまして、まさに防災のプロフェッショナルということで、桑名市に来ていただいて今頑張っていると思います。

まず、藤井防災指導監から、防災専門家の立場から、災害時のリスクなどについてお話をいただきたいというふうに思います。

では、よろしく願いいたします。

【防災指導監】

画面で説明をさせていただきます。一番見やすい姿勢がいいかなと思います。なるべく頭を使っていると思います。

今、市長のほうからご紹介いただいたんですけれども、恐れ多いんですけれども、元自衛官です。防衛大学校を終えて、一番初めの勤務が三重県10年余り、ほとんどが中央で仕事をしていました。防衛省で仕事をしていました。実を言いますと、皆さんにお話ししていなかったんですけれども、防衛省の中の分析機関、中国、北朝鮮にかかわる核兵器、ミサイル兵器、通常兵器の分析、あるいは開発動向について、大臣報告等をするといったような役割を担っていました。その分析手法を利用して、実は今日は説明させていただこうかなと思っています。

とはいえ、私は、阪神・淡路、中越、中越沖、東北の内陸部地震、そして東日本では、被災しながら災害派遣をやるといったような経験を踏んで、そのときの現場感覚なんです。教育と違うところの現場感覚なんです。ここなんです。自分の命は自分で守るということ。小さな子どもからご高齢に至るまで、全てこの感覚が絶対的に必要だという認識を持っています。なかなかお話をしても伝わりません。でも、そのためには地域の協力が絶対的に必要。

今、皆さんを個人として置いてみましょう。ご家庭の中で防災にかかわる考え方、東京からお見えになった方もおみえでしたか。そうですか。ちょうど石原都知事のときに、首都直下で相当都庁さんとは研究させていただいたんですけど。基本的にご家庭で考えておられる防災を基準にします。今度は、児

童・生徒が中心にするので学校。考える範囲は、学校と保護者宅の間、そしてその2つは、それぞれの災害対象が何かによって変わってくるだろうと。ただ、子どもたちはずっと学校にいるわけ、家にいるわけではない。必ず通学路がある。地域の皆さんの協力がなければ難しいなど。この考え方、それぞれの輪っかの考え方が1つになるのが桑名市にとって最も理想的だろうと考えるところなんです。

テーマは画面のとおり3つ。基本的には災害想定について。桑名市は、私はここに来て、はたと困りました。なぜか。実を言うと、古墳時代から続いている多度町、養老山地と輪中があるんですよ。それと丘陵地。そして、長島町は完全な江戸時代に構築をされた輪中。桑名市は、あたかも地面が続いているように見えますが、1600年以降、本田忠勝さんが3つの島をつないで、川の流れすら変えてしまって、それが、実を言うと、こちらに流れている員弁川、町屋川というふうに桑名市の方は言っています、大山田川、この流れすら変えて、城を中心としたまちづくりをした。つまり、川があったところは埋め立てたんですね。ここに自然災害を対象とする地形条件を考えないと、桑名市の防災は成り立たないかと思っています。

代表的な学校の標高を挙げました。桑名市では、液状化、あるいは水害を考えなきゃいけないんです。標高2メートルぐらいないと、桑名市の皆さんが言っておられる水がつくという景況になります。その一例として挙げさせていただきました。これは単なる印象です。

桑名市は大きな災害史を持っているんです。560名の方が亡くなって、23名の方が行方不明、いまだにですよ。それが伊勢湾台風です。災害対策基本法のベースになった災害です。当時、全部で5,100名以上の方が亡くなっておられる。ご存じですよ、当然。

この教訓がずっと生かされていけばいいんですが、この画面を必ず皆さんに見てもらっているんです。この水害に遭ったところ。なぜこれを見ていただいているか。これは長島町ですよ。堤防があるところは全部水がついてしまいましたからね。お城がこの付近にあるんですね。何でこれを見ていただいているか。私は、現場に行って、人間の力、要するに建築技術が上がっても、自然の力には勝てないと思っています。歴史は繰り返すというふうに私は考えています。言うまでもないことだと思います。

災害想定。桑名市だと、地震が起こったら、すみません、今日は時間が短いのでどんどん飛ばしていくんですけども、市民の皆様にご伝えていることです。家屋倒壊が起こる、液状化が起こる、津波が起こる、火災が起こる。これは桑名市の考えるべき災害想定だと考えています。火災はどこに行っても起こっています、現場で。初期消火訓練、意味がありますよね。子どもたちの消火訓練等は非常に重要だと思うんですね。津波とかいったような様相はよく考えなきゃいけない土地にあります。

では、大きな洪水は。台風とか、ゲリラ豪雨が来た場合は、土砂災と洪水、高潮。これは伊勢湾台風で経験した災害ということになります。

これをキーワードにして。本当は市民の皆さんにいつもしているんです。過去災害が起こったとき、桑名市が大体どれぐらいで揺れるか、この庁舎がどれぐらいで揺れるか、学校がどれぐらいで揺れるか。その基本的な発想が必要だと思うんです。黄色いところは6弱です。緑のところは5強です。ところが、国は2つのパターンをつくり出しました、東日本のおかげで。想定外を国は想定したんです。表現でいうL2というタイプ。1000年ぐらいに1回といったようなものを想定するとワンランク上がります。黄色いところが6強に上がります。

子どもたちにも伝えています。この中でポイントは2つ。でも、1つは、6弱ぐらいの揺れだと、立っていることが難しい。これを防災ノートで子どもたちは学んで頭に入れるんですが、私の感覚は、立っていることが本当に難しい状況になったとき、目の前で手をつきそうだと思ったら、6弱ぐらいだということ直感的に把握すること。6弱ぐらいの揺れだと、耐震性の低と高とあるんですが、昭和56年5月31日までにつくられたお宅。実を言うと、倒壊するものがあるから6弱は気をつけなさいと。6強になったら、倒壊するものが多いということなんですよ。ポイントの1つなんですよ。でも、鉄筋コンクリート、耐震の工事をやったところはこれには該当しません。基本的にはもちます。ただ、ひび割れ等がありますよ。

もう一つのポイントは、物が倒れてきて亡くなった方、阪神・淡路は6,434名のうち、8割以上は、

この物が倒れてきて、この上の建物が落ちてきて亡くなっているわけですね。ということは、学校に目を置いたら、周りのものがちゃんととまっているかとかいったようなところが極めて重要なところかというふうに思うところですね。建物の枠組みは大丈夫なことから、中身をどうするかということに移っていくんだと。

津波の想定です。この色がついたところ、これは、県のシミュレーションで出した結果なんです。深さがどうのこうのというのは問題ではありません。水がつくという表現のところ、色がついたところ全部です。堤防が機能しなかったという場合。大体この現地をずっと歩き回っているんですけども、どこか似ていたんです。どこに似ていたか。これは、伊勢湾台風のときの浸水域とほぼ一緒なんです。

このシミュレーションの前提は、標高差のところ、例えば四角い柱状にいっぱい並べておいて、そこで水が大体どれぐらいつくかという想定をして、これぐらいの水がつくという計算の手法をとるんですね。桑名市だと、この計算のデータの結果をずっと調べて現地を見ていくと、大体標高1.7メートルぐらいのところへ水平に水がついているというふうに想像ができます。だから、2メートル以上ないと危ないですよという話なんです。

伊勢湾の外で南海トラフの地震が揺れるので、津波が来るのには、一番近いと1秒間に10メートル。100メートル、10秒ですね。桐生君と一緒にですね。津波高3メートルというのは、実を言うと、木造家屋が潰れる基準。気象庁が3メートルを超えると、巨大なというふうに表現をします。絶対的に注意が必要です。問題は、桑名市はどれぐらいの津波を県が想定しているか。実を言うと2.4メートルです。だから安心というわけではありません。液状化もあるし、堤防が崩れるしということを想定しなきゃいけないですね。

もう一つ、考える条件として、これは50センチと考えているんですが、最近のでは20センチ。本当に伊勢湾の外で揺れたら、その波が来るのに大体90分。一番高い波、県が言うには、2.4メートルが来るのに大体90分。この時間をどう活用するかというのは、私たちもそうですし、学校長さんが考えられたりなんかすることかなというふうに思っているところです。

液状化です。先ほどお話ししたとおり、もともとの地形特性から液状化はいっぱいあるんですけども、PL値、PLゼロ、これはしません。ゼロから5だと低い、5から15だと高いと、こういうふうに一般的に建築の関係の方はよくわかる数字なんですけど、よくわからないので、私は、東日本のときの土木学会のデータを調べてみて計算しました。ゼロだと基本的にしません。ゼロから5だと、100メートル四方で大体2%、5から15で10%、15だと20%以上が液状化する、東日本ではですよ。絶対ではないので難しいですね。液状化は、今、国内の学者がどんなに調べても、どこでどういう液状化が起こるなんてわかりません。

その代表的なところが伊曾島小学校。これは、江戸時代の後期あたりに干拓をしたところなんですけど、やはり30ぐらいのところ。学校にいれば学校でいいですよ。子どもたちは家から通っていますからね。液状化で今まで亡くなった方は一人もいません、液状化だからといって。では、何を考えればいいか。簡単なんです。学校へ行く経路を3本か4本考えておけという話なんです。Aという道がだめだったらBという道へ、BがだめだったらCという道へといったような工夫が必要な環境に私たちの学校はありそうです。各学校単位を調べなければいけないですね。

活断層ですね。地元の方はよく知っていて、市長も当然これはご存じ、桑名高校ですね。活断層そのものは、実を言うと一番外側、線路沿いのところなんですけども、ここに、大体、深いところ、浅いところとずっとあるという話なんですけど、活断層そのものは、地面のかたいところと弱いところがずれてしまう景況。大桑道路という道路からこの間なんですけども、その中で一番象徴的なところ、南北にずっと線が走っている。風化してよくわからなくなっていますが、基本的にここにあったということになります。関係する学校が非常に多いですね。

ところが、成徳中は別にして、大成小とか、あるいはこちら側の台上にあるところは、昔豪族が家を建てたところなんです。つまり、昔からそこは大丈夫なところだった、強いところではあったというのがこの地域の特性になりますね。そこと弱いところの差がこの原因と。

周期は1400から1900年に1回。私が言っているわけではありません。学者が言っています。1200年から16世紀、これは天正地震、織田信長が死んで4年後、1586年。一番古いところの計算で、単純計算をすると、1200足す1400、2600。つまり、次に起こるといふふうに学者が言っているのは、次、27世紀ですね。誰も生きていません。ところが、それを継承するのが私たちの仕事でもありますし、南海トラフが起こったときに、これが連動しないとは言えないんですね。そうすると赤いところになるんですね。多角的に私たちの地面がどれだけ揺れるかというテーマをお話しています。

洪水ですね。ご覧のとおり、水がついたところ、水がつくというところは水色。広くていっぱい。こんな状況なんですよ。いいのは台地だけなんですよ。台地は次、何が心配か。土石流、急傾斜地。こんな環境にあるんですね。これを具体的に説明しても意味がない。

そのうちの小学校。深谷小学校というのがあります。小学校を拡大すると、校舎のこちら側、急傾斜地が裏側にあるということでちょっと注意しなきゃいけない。道路の向こう側に体育館があるので、避難所としては生きるんだろうなと思うんですけど。こんな景況を持っている学校もちゃんとチェックしなきゃいけないという例です。

この地域の名称を挙げてみても皆さんはぴんとこない。地元の方だとすぐわかるんですが、今、前提とした仮説としたところの倒壊云々、あるいは土砂災害云々を全部拾ってみて、どこの学区でどういう災害想定が起こるかというのを挙げています。これは、学校を中心にさらに分析を細かくしなきゃいけないんですけどもね。

大山田地区は、基本的に火災に注意すれば、その他のものについては大丈夫。ということは、その地域で持っている学校の地位、役割が変わってくるだろう、対処すべき対応の容量も当然違うだろうといったようなことが言えるかと思います。

桑名市の災害特性を特徴的に話するとこんなところかというふうに考えているところです。大体予定の時間になりました。終わらせていただきます。

【市長】

どうもありがとうございました。

今、藤井指導監が来ていただいて、桑名の防災の意識が少し高まりつつあるのかなというふうに感じていますけれども、まず、自分の身は自分で守るといふ、この意識をいかに子どもたちに持ってもらえるような教育をするのかということが1つ大事なのかなというふうに私も感じました。

それでは、今どんな防災教育をしているのかということ、続いて、教育現場における防災について、事務局から説明をお願いいたします。

【教育監兼学校支援課長】

学校支援課、高木でございます。よろしくお願ひいたします。座って失礼いたします。

お手元の資料をご覧いただきながら要点をお話しさせていただきたいと思ひます。

まず、教育大綱、それからくわなっ子教育ビジョンの防災教育の位置づけとしましては、大綱では、特に教育環境の整備というところで、子どもたちが安全で安心してもらおうことができるような環境体制を整えるといったようなこと、それから安全教育、防災教育、防災対策等の推進、取り組みということになっております。

それから、くわなっ子教育ビジョンにおきましては、特に、重点目標としましては、安全教育、防災教育、防災対策の推進に取り組むというようなこと、特に、子どもたちの危険予測、危険回避能力を身につけさせるというようなことを中心に取り組んでおるといふところでございます。

最新の取り組み状況ということで、各校、調査をさせていただいたところでございます。それはⅡになります。そちらでは、まず、防災に関する訓練の実施状況につきましては、地震、火災を想定した訓練の割合が高いということ、それから、津波の浸水が想定される学校では、津波に対する避難訓練を実施しているところでございます。

それから、実施状況につきましては、防災ノートを中心といたふことで、こんなような形で、県からも配給されているものでございますけれども、これをもとにやっているといたふことで、小・中ともに

100%の活用というふうになっております。それから、それ以外につきましては、訓練、講話という形でのものが多いというふうでございます。それから、今現状では、防災タウンウォッチングや防災マップの作成という点では割合は低いということになっております。

それから、通学路の安全マップにつきましては、小学校では、通学路のない悠分校以外の全ての学校で作成をしております。ただ、子どもたちがマップづくりに直接参画している割合は低いというところが現状でございます。

それから、次、めくっていただきます。3番でございます。

防災・危機管理課との連携ということで、まず、小・中学生の防災学習の実施ということで、4年生から中2まで書いてございますけれども、こんなような内容で指導をしていただいております。

それから、避難確保計画作成等の支援ということで、平成29年6月の水防法、土砂災害防止法の改正に基づいて、浸水想定区域や土砂災害警戒区域内について、計画とか、訓練の実施が義務となったというようなことで、そういった計画書等の作成につきましてもご支援をいただいております。

以下に、津波、それから洪水、土砂災害等の危険の指定されている学校の一覧を後ろに載せていただきました。

あと、消防署との連携につきましては、火災のみということになりますけれども、全校で実施訓練としてやるときに、シューター訓練、煙体験、それから講話等、消防署からの教育で実施をさせていただいております。

あと、今後に向けてということでございますけれども、まず、今一番課題となっておりますのはマンネリ化と、またかというようなことで子どもたちが思ってしまう。この辺が一番危険であるというようなことで、マンネリ化を防いでいかなければならないという点。

それから、防災マップにつきましては、これは実際の場面に応じた、子どもたちが直接作業をすることで学んでいくということになっておりますので、これは有効であるということで、今後さらにはこの活用をしっかりしていこうということです。

それから、通学路の安全マップの作成を核とした取り組みを充実ということで、今後は、子どもたちの主体的な活動をしっかり保障しながら定期的な更新を進めていかなければいけないなということで、数年以内の更新に努めていかないかんというところがございます。

それから、あとは、先ほども説明のほうでございましたけれども、実体験的に、この揺れが来たらどんな感じになるのかというような体験なども、地震車などの体験をしていくと、子どもたちもさらにイメージできるだろうということで、そういった地震体験車や防災タウンウォッチング、防災マップ等、県はさまざまなプログラムを用意してくれておりますので、こういったものを積極的に今後は活用を図るといかなというふうには考えております。

それからあと、参考資料のところについては、今お話しさせていただいたところ、それについての具体的な裏づけ、説明等がいろいろ載せてございますので、またこれをご覧いただきながらご討議いただければというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。

以上でございます。

【市長】

ありがとうございます。

教育委員会としても、防災教育をしっかりと頑張っているというような話を今いただきました。

その中で、それぞれのご説明を踏まえまして、皆さんからご意見をいただければというふうに思います。

こちらから参りますかね。

【教育長】

まず、私のほうから。

【市長】

お願いします。

【教育長】

今、藤井指導監から説明を受けまして、改めて桑名の状況というのを再認識させていただいたような思いでございます。学校現場では、今、教育監が申し上げましたけれども、指導監も言われたように、自分の命は自分で守ると、とにかく小さいころから徹底していこうという方針を1つしっかり持って今進行しているということでございますけれども、それと、中学生の位置づけで、当然、自助、次の共助の部分を中学生の子たちに、そんな心を、姿勢を持ってもらいたいということも1つ含めて考えているわけでございます。

それと、大変危惧しているんですけども、最近、この地域は、地震等大きなものが、一時よりも、東日本の当時から比べると、子どもたちも含めて、学校現場、市民の方々もそうかもしれませんけれども、若干、また避難訓練なんだというような、マンネリ化という言葉で言われましたけれども、その部分が少し気にはなっております。

当時、東日本の直後に比べると、前は、建物の中に、廊下に置いてはいけないとか、大きな図書のものには歯どめをかけるとか、そういうことを盛んにやっていたのですが、最近、そういう視点が若干甘くなってきているなということも1つ思いますのと、もう一つは、地域の方々とどういうふうに関連していくというのが、できているようで、実際に災害が起こったらどこまでいけるのかというのが少し心配なところがありまして、私自身では、そのような2点ばかりが、今、教育監も少し触れましたけれども、これからみんなで考えていって、よく防災の日常化というのを言われますけれども、そのような心持ちを常にしていくということが大事かなと、そんな思いを持っております。

【市長】

ありがとうございます。

幾つかテーマをいただきましたけれども、自分の身を自分で助ける意識みたいなものが本当に大事だと思いますし、私も感じるのは、先ほど防災指導監も言っていたいただきましたけど、これぐらい揺れたらこれは6弱で、これぐらい、建物が倒れるよみたいところの、その前段階の体感を教えるというか、体で感じて何かするみたいなのが、今の若い人は大分弱くなっているのかなという感覚があるので、そういうものをどうやって身につけるかが非常に課題かなというふうに私も思っています。

先ほど、中学生の共助というのは、中学生ぐらいになれば、助けられる側ではなくて、助ける側という意味の共助ということですかね。

【教育長】

そうですね。

【市長】

中学生ともなれば、しっかりと助ける側にも回ろうということも大事かなと思いましたが、また、防災意識の低下というのは、学校現場のみならず、市民の方にも当てはまっている部分でありまして、市民満足度調査などの結果を見ても、3.11の直後にとった調査では、ものすごい防災に力を入れてほしいというのがありましたけれども、徐々に下がってきているというのを繰り返していますので、特に、伊勢湾台風以降、そういう意味では大きな災害がなかなかここには起こっていないというのもあって、ここは非常に大事。もっとより市民の方とみんなで高めていかなくちゃいけないのかなというふうに思っています。

地域との連携という意味でいくと、まさに災害が発生すると避難所としての開設もございますし、いかに子どもたちを地域全体で守るのかという視点が持てるのかなということも課題かなというふうに感じました。ありがとうございました。

では、続いて、稲垣さん、いきましようか。

【稲垣委員】

まず、非常に有意義なお話をありがとうございました。

なるほどと、胸に詰まされる感じがするんですけども、聞いていて、2つの視点が要るなと思って。まず1つは、防災教育という視点ですよね。防災教育も、今、桑名市はいろいろ取り組んでくださって

いるなというのはすごくよくわかったんですが、藤井さんのお話を聞いて、本当に学校ごとにカスタマイズするようなものやっていく必要があるんだなというのはすごく思いました。

あとは、地域という絡みを考えると、今やっているのかどうかわからないですけど、防災訓練ってありますよね。あのときに、子どもだけでやるのではなくて、そのときはオープンにしてやるから、みんな来てねとかと言って、藤井さんに来てもらって、話してもらって、そういう防災イベントみたいなのを各学校ごとに、津波が来たら、うちの学校はこうなってこういうことが起こるよ、地震が来たら、ここはこうなって、うちの学校はこういうふうになるよとかという、そういうのをみんなで地域を交えてやったらいいのではないかなというのはちょっと思いました。

あとは、もう一つは、防災教育と、本当にその現場になったときに学校がどう対応するかみたいなことも考えていく必要があるなというのはすごく思いました。

あとは、個人的には、教育長と似ているんですけど、中学生にAEDとか、心拍蘇生法とか、大人でも私はやれないと思っています。なので、こういうのでもきっと必要だとは思いますが、まさに本当に中学生ぐらいになったら自分たちはどう動いたらいいのか、しかも、地震、そういう災害の後の動き方、そういうのも教えられるものがあつたらいいなというふうにも思いました。

以上です。

【市長】

ありがとうございます。

ちなみに、私も、学校ごとにカスタマイズというのは非常に大事な視点だなというふうに思いましたし、実際、教育委員会で、避難確保計画の作成などでいくと、いろいろ考えてもらっていると思うんですけど、これって、防災指導監から見ると、エリア的には正しくできているのかとか、そのあたりはどういうふうに見られていますか。多分、それは教育委員会側はやっているといくことになっているんだと思うんですね。

【防災指導監】

今の地域、桑名市全体を見てということですね。

【市長】

ええ。

【防災指導監】

大きく地域の関係では、3年に1回の自主防災訓練を行っているところで、ほとんどその現場に私は今行かせていただいて、指導させていただいているところ。学校と連携しているような自治会さんは、小さな子どもたちも一緒に集まって話を聞こうといったような努力を続けているところになります。それも、浸水地域にある学校の先生方については、比較的その意識も高いところなんですけど、そうではない学校の先生方のところだと、比較的安定された、備えはしなきゃいけないことは承知をされておられるんですけども、現実の対応としては個別的な差が出てきているというような印象は受けます。

【市長】

そこで、土砂災とか、いろんな災害がおそらくそれぞれの学校にもあるんでしょうけど、そのあたりは、学校も意識はしているのだけれども、浸水域の人たちのほうが危機感が高いというような感じになるんですかね。

【教育監兼学校支援課長】

やはり子どもたちの命を守るというときに、緊迫した状況が起きやすいということで、意識は違ってくるのかなというのはありますけれども、現実の問題として、学校でそれこそ物が倒れてくるとか、具体的なイメージを持って、対策とか、それから避難訓練の方法も考えていかないと。その点では、今、市長がおっしゃられた体感力というか、想定力といいますか、それをまず教員がしっかり持っていかなければいけないなということは考えさせてもらいます。

【市長】

僕は、広島7月豪雨の際に、私どもも熊野町というところに職員を派遣していたんですけども、

何年か前には、広島のみさに裏側で大きな土砂災害があって、その裏側というか、近くに住んでいるにもかかわらず、自分のところに土砂災害が起こるとは思っていなかったという、そういうような感覚になるんですね、人というのは、自分だけは大丈夫だろうというような。正常のバイアスをいかに外すのかというか、ここを、まだ浸水エリアだけではなくて土砂災のあるエリアもありますし、そのあたり、いかに全体で頑張ってもらおうかというのが非常に大きな課題かなというふうに思いました。地域の方々とうまく学校が連携してやっているエリアもありますし、ただ、そういうものをどんどん拡大していただくと。学校側からというよりは、地域のほうからうまく声をかけていただくといいのかなというふうに思いますけれども。

新潟県の見附市というところがありまして、ここは、今の市長さんが市長の任期中に2度も地震に遭う。中越地震と2つ地震が発生したという珍しい市長さんで、この方は、1回目の地震が起きた後に、中学生たちにも災害意識をしっかり持ってもらいたいと思っていながら、なかなか教育現場側からは、やるのに限界があるというふうに感じておられていたら、そもそもやっていた水防訓練に対しても、3人の中学生がまず自分たちも参加させてくださいと言って入ってきたと。そうしたら、そこから10年ぐらいたって、今ではほぼ九十何%というふうに市長さんはおっしゃっていましたが、中学生の方が自主的にそういう訓練にも来るようになったと。そうすると、完全にあとはずっと繰り返しているといえますか、これからの子どもたちはみんなそれに参加するということになっていくので、すごく意味があるなということを経験したことで私も教えていただいたんですけども、自分たちのこととして最後は捉えていけるようにしていくのが非常に大事だなというふうに感じました。

ありがとうございます。

続いて、松香委員、お願いします。

【松香委員】

大変恐ろしい資料をありがとうございます。すごいよくわかる資料で、これ以上のものはないすばらしい資料だと思うんですけど、よくわかり過ぎて本当に大変なんだなと思いました。

個人的に、ずっと昔、どうしてそういうことがあったか忘れたんですけど、伊勢湾台風のときに自衛隊で死体処理に当たったという方とお話するチャンスがあって、毎日毎日死体だけを掘って処理するという話を今でも鮮明に覚えています。そういうことが起こるんだなって、本当に起こったらそういうことなんだと思うので、そういうことを想定するのですごく難しいので、どなたかお話しできる方が、現実にはそうなんだということを知っておくといいと思います。

東京から来ているんですけど、こちらに来ると、東北大震災の影響とか、人の話に上る度合いがこちらは薄いなということを感じますね。距離はすごい問題になって、西に行くほど話は薄いなということを感じるので、人間は忘れやすいなと思います。

先ほどから出ている、この間もちょっとお話しさせていただいたんですけど、桑名の子どもたちは大変に従順で、真面目で、よく話を、先生の言うことも100%聞くと、親からこの間言われたので、とにかく自分の命は自分で守ると、学級担任の言うことなんか聞いている場合ではないこともあるということをしっかり教育していただかなきゃいけないって、この間申し上げたら、稲垣委員から、そんなことはありません、うちの子に限ってそんなことはありませんとお答えいただいたんですけど。

私は英語コンテストというのをやっていて、そういう親から訴えがあったんですね。桑名の子どもたちは100%先生の話を聞くので、先生のほうからこういう注意をしてほしいという話があったので、私はびっくりして、それをこの間申し上げたんですけど。自分の命を自分で守るといって、先生の言うことを聞いて、校庭で整列していたら、津波が襲ってきて亡くなったという事故が実際に起こったわけですから、教員の言うことを聞けといふのと、教員の言うことを聞くなといふ相反することは根本問題かななんて思っております。

あとは、私は東京の端っこから来ているんですけど、うちの地域は全然大丈夫だという意識はすごくありますよね。だけど、うちのすぐ、歩いて10分ぐらいの中学校で、この間、災害のときにお迎えの訓練というのがあって、四百何十人の学校で二百何人の保護者が来たって校長先生は感激していました。

中学校でそれだけ来るのって、大したものだなと思ったんですけど、そういうことは常にやっていることが大事なのかなって思います。全然災害が起こりそうな地域ではないのに、よく親が対応したなと思っています。

【市長】

ありがとうございます。

ちょうど伊勢湾台風を経験した方が、当時、生まれた人が今59歳になるような年でして、いまだに、要は、桑名に多くの伊勢湾台風経験者がおられて、今、これは民間さんというか、NPOさんというか、非営利団体の方たちの活動の中で、その方たちを語り部として伊勢湾台風について子どもたちに語り継いでいこうというような取り組みを学校と一緒にやっていただいています。これは非常に意味があるなというふうに思っていて、今の子どもたちは、既に堤防が整備されて、ものすごく安全な場所になったところで生まれているので、危機感が低いんだなと。実際、堤防に上がってみんなで見ようと見ると、こんなに自分の家は水面よりも低いんだみたいな、そういう子どもたちが後から感じるみたいなことがありますので、しっかり体験を語り継ぐのはすごく大事ななというふうに思いました。

あと、東日本大震災の話、やはり距離があるとなかなかコミュニケーションの中でも出てこないということもありますけれども、まさにそうで、自分事にならないと、なかなか皆さん、災害のことが話題に上らないんですね。今年の台風の21号と24号と連続で来たんですけど、21号が非常に風台風で、たくさん停電したんですね。停電が2万8,000世帯で、皆さん、停電は困ったと。28時間停電しただけというと、された人に怒られますけれども、28時間の停電で困った、困ったと。行政は何をしてくれるんだと。それは中電さんなんですけど、たくさんクレームを我々もいただきまして、でも、自分のことになると、初めて皆さん、危機感を持たれて、実際マンションの方とかは、停電すると水もポンプアップされないの、トイレの水が困るから、水は困ったな、何とかしようとか、充電ができる、車をリーフに変えようとか、いろんな話をやるとされるようになりましたけれども、自分のことになるとそういう意識になります。

実は、台風24号の際は、高潮が非常に厳しいぞと。満潮の時間と台風最接近の時間がほぼ同時になるということで、気象庁も伊勢湾台風並みの高潮になる危険があるというような報道がされました。そういうことがされると、伊勢湾台風を経験した人たちをはじめ、大丈夫かなということで、かなり避難行動も早かったように思いますが、自分のことにはいかにするのかという、しかも経験していない人たちを対象に、いかに災害を自分事にするのかというのは、繰り返し伝える必要があるのかなというふうに感じました。

【松香委員】

若かったころに、毎日死体処理をどれだけしたかという話、そういうすごく嫌な話でもしない限り、今の子は他人事なんだろうなって。すごいそれは私にとって衝撃な話でした。

【市長】

だから、3世代で暮らされている子で、伊勢湾台風を経験者、おじいちゃん、おばあちゃんとお住まいの子どもたちとかは、やっぱり意識は高いんですね。でも、今はまた離れて暮らしていたりとか、普段からそういう方と接するということの大事さを感じます。そういう機会を学校現場でもどんどんつくってもらいたいというふうに思いますし、真面目な子どもたちに、自分の命を守るためには先生の言うことを聞かずとも逃げろみたいなことは非常に大きなテーマですので、先生の方がどうやってそれを指導するんですかね。どうやって指導しますか。

【教育監兼学校支援課長】

基本的には、自分の命を自分で守っていかなければいけないということ、目の前で想定外のことも起きるんだよと。だから、普段、こうなるからここにいましようということが必ずしも起こらないので、それは各自考えておかなければいけないということと、訓練のときも、これもマンネリ化の防止にはなるんですけど、通路、いつも逃げられると思って行ったら、ガードの下って、ここから通れませんかよとなっていたりとか、そんなような想定外の状況をあえてつくっていくとか、そういうことも安全には

配慮しつつしていかなければいけないということが話題にはなっているんです。

【松香委員】

では、学級担任を全く除いて訓練するというのはどうですか。

【安藤委員】

やっていますよね。休み時間とか、自分たちで判断できるようにということで。

【松香委員】

とにかく先生の言うことを聞くというのが小学校では特に大事。

【教育監兼学校支援課長】

バリエーションですよ。場合によってはきちっと指示に従ったほうがいい場合も。

【市長】

それはそうですね。

【教育監兼学校支援課長】

そうではない場合とか、それこそ先生が休み時間なんかで、ぱっといれない状況で突然揺れたとか、当然ありますので、そういった場面場面においた訓練をいろいろバラエティーに富んでやっていくのが大事かなという気がします。

【市長】

今、想定を外に言わずにやる訓練を何て言うんでしたっけ。

【防災指導監】

シェイクアウトとか、いろんな……。

【市長】

急にやりますよね。そういうものって学校でもやっているんですか。今日は避難訓練がありますよって言ってやるパターンと、全く言わずに、今、これが起こったとしたらどうするみたいなものってやっていますか。

【教育監兼学校支援課長】

学校によって、やっている学校もあれば、今日はというふうに予告している場合もありますので。

【市長】

予告がおそらく大半ですよ、当然。

【教育監兼学校支援課長】

そうですね。今日、時間が何分で済みましたとって、時間を中心にやっているところとか、まだまだ型にはまっているところも多くて、最初にそういったことでありますとか、訓練もHUGなんかが出てきたりとか、現実に即したもので出てきておりますので、今後はそれを積極的にもっと取り入れていこうというようなことはこちらから指導していく必要があるかと思っています。

【市長】

いろいろ授業実数とか、いろいろあるので、いろんな課題もあるかと思います。

【教育監兼学校支援課長】

時間確保というのはかなり大きな。

【市長】

おそらくほかでやらなくちゃいけないことが増えてきているので、防災がやりたくてもやれないということもあるでしょうね。

では、そのあたりの課題もよくご存じの安藤委員によろしくお願いします。

【安藤委員】

予告なしでやることもあります。ですが、大体子どもたちがパニックなったりとか、そのことでけがをしてはいけないので、それこそ防災ノートを使ったりとか、地震が起きたらどうするみたいな授業を先に組みますよね。そうすると、大体子どもたちはそろそろあるんだなとわかってはいるんですけども、一番最初、年度初めは、避難経路も子どもたち、先生もきちっと把握しないといけないので授業中

にやるという形をとって、大体2学期、3学期には、休み時間にするとか、それから、自分がいたところでは、先生にも伝えなくて、管理職だけがわかっている、1週間以内にみたいな感じでやったこともあったんですけども、そういうようなことはしています。

それから、きっと放送施設も使えなくなるよというので、ハンドマイクでわーっと言ったりとか、いろんなことをやっていたんですけども、あるとき、消防署ではなかったかもわかりませんが、専門の方に来ていただいて避難訓練を見ていただいたら、本当にこれでは駄目ですみたいな話があって、まず基礎的なところ、そんないろんなことをやらなくて、きちっと教師が引率をする、そここのところからもう一回きちっと見直しをしてくださみたいなことをかなり言われて、子どもたちはわりと整然とできているんですけど、先生たちに危機感がないみたいなことを言われたことがあって、だから、そうやって専門の方に入ってきていただくとか、それこそ藤井指導監のように、稲垣委員が言われたみたいに、学校に来ていただいて、見ていただいて、話をさせていただくとかということはずごく大事なんだなというふうには思いました。

さっきから話題になっている自分の命は自分で守るということはどういうことなのかなって。子どもに何を教えたなら自分の命が自分で守れるか。私もよく避難訓練のたびに言っていたり、特に交通安全のときには、自分の命は自分で守らないとと言っていましたけど、それはどういうことかなというふうにはちょっと思うんですけど。

何かあったときには、わーっパニックになったりとか、子どもたちとか、何人も一緒にいるわけだから、こうだとか、何が何みたいなことでぱっと動いちゃうみたいなことがきくとあると思うので、何があっても冷静でいられる、行動できる、それから判断できるということが大事だと思うんです。予告なしの避難訓練をしようとしたときに、まず子どもたちにふだんから放送をきちっと聞けるようにしてくださいと。

休み時間なんかは、わあわあ言っていて、ピンポンパンポンと鳴っても、知らん顔をしてわあわあ言っていると、大事な放送でも聞けないわけで、別に避難訓練のことだけではなくて、ピンポンパン鳴ったらひゅっと耳を傾けるような、そんな癖をつけていかんとあかんですよということ、放送がしっかり聞けるというようなことがまず大事なんだなと。とにかく、何についても、何かあるぞと言われたときに勝手に動こうとしないで、人の指示を聞いたり、どうするかって考えて動けるということが大事だと思うんです。

それは、日ごろからのいろんな行動、特に校外学習とか、外へ出ていったときに、横断歩道で、車が来るから、前は行ったけど、自分は止まろうとか、そういうようなことができる子が大事なかなと思うので、いろんなところで経験をして、そのたびにこういうことがあったよねとか、周りに目を向けられる、遅れて来ている子がいたら、ちょっと待ってあげるとか、そういうことができる子たちをふだんから育てるように指導者の側が意識していかなければいけないのかなと。教育長も、防災の日常化というふうに言われましたけど、それがすごく大事ななと思います。冷静に行動できるということと、それから、わーっとなったら、自分はどこへどうするかというイメージを持っておくことが大事なので、それが避難訓練ということではないかなと思います。

一方で、自分の命を自分で守れない子たちもいると思うので、障害のある子たちとか、それからパニックになりやすい子とか、私がいたところでも、不審者訓練をして、不審者があまりにも上手に演技を先生がしたものですから、ものすごい子どもたちがパニックになって、うわっとなって、それこそ廊下に雑巾干しがあるところへぶつかってめがねが壊れちゃったみたいなこともあったんです。なので、パニックになりやすい子とか、そういう子たちは、指導者がきちっと把握しておいて、この子にはこうさせなければみたいな、この子のことはどうしようかと。

さっきも、教育長室で、私が母の介護をしていますので、寝たきりというか、ほぼ全介助の母なんですけど、もし地震が起きたら、母にはどうしたらいいのだろうみたいな、布団をかぶせるぐらいしかいかなというふう思ったんですけど、一人一人に、この子にはどうしなければいけないのかなということもきちっと学校では把握しておいて、そして、いつ何時あってもいいように、目を離してはいけな

いなということはあるんだろうなというふうに思いました。とりあえずはそういうことで。

【市長】

すごいですね。幾つかいただきましたけど、避難訓練の基本が大事なのか、それともバリエーションというか、新しい、どんなことにも対応できるような訓練が必要なのかというのは、また学校は基本的なことがメインにはなるんですよね、おそらく。

【教育監兼学校支援課長】

やるのが一番基本で、何のためにそれをやっておくかというのをわかった上でバリエーションが出てくるかなと思いますので。

【市長】

これは、防災の観点から見ると、どれが大事というのがありますか。基本が大事なのか、それともどんなのにも対応できるのが大事なのかというのは。

【防災指導監】

結論は、両方とも大事なんです。今、学校の中心は、消火訓練、消防訓練をベースにしたところの地震対応の行動をずっと訓練につなげておられるところ。このベースは変える必要はないと思うんですね。ところが、その年代年代に応じたところの教師と生徒、あるいは児童を分けたところの、実を言うと、DIGという表現、つまり災害の図上演習みたいな頭の演習が、その年代年代に応じたものが必要になってくるかというふうに感じているところなんです。

先ほどから出ている例の一番悲惨だなと思ったのは、大川小学校の例、84名の方が亡くなって、うち10名が先生。子どもたちは計画どおりに学校のグラウンドに集まって、そこにみんな立たされたまま。もどす子もいれば、泣き出す子もいる。中には、ももにかみついてくるような子どももいた中で、そこで、子どもたちがどう判断すべきだったかというのは、先ほどのお話のテーマ。では、先生方が本当に何を判断すべきだったかという問題。これは非常に難しい問題だというふうに感じます。今も裁判が続けられている。

ちょうど、ワシントンDC、情報機関で仕事をやっていたときに、向こうで同じような訓練をしたときに、子どもたちを守るときに、女性は背中に子どもを置いて守ると。先生も同じなんです。日本人の場合の特質としては、実を言うと、逆に背中を相手に向けて守る姿勢をとるといったような本質的な特性の差がある中で、私たちがどんなことをやればいいのかと。今のイメージは、子どもを守るために、周りの外的から目をそらすというのか、外的にちゃんと目を向けて子どもを守るかという差異のことを今話しています。

そのところを大川小学校の場合は、先生方が情報をきちっと得た上で判断すべき要素があったのではないかなと。これを長島の小学校の一部の先生に話をしたら、教頭先生から、藤井さん、それは先生方に失礼ですよというふうにご指摘をいただいたんですが、後から保護者にその話をしたら、後から校長先生以下の方も、その話は貴重ですよというふうに賛否両論を得たというふうに感じたところです。

すみません、雑談で。

【市長】

でも、これはまさに国民性という部分にもおそらくかかわってくる非常に大きな課題かなというふうに思いますよね。先生にもしっかり危機感を持っていただきながら、本当にまさにその場その場でどう対応できるかが生死を分けますので、頑張ってくださいのが大事かなというふうに思います。その中で、暮らしの部分から冷静に普段でも判断できる、行動できる子をつくるということと、あとは、本当にイメージができるように、これは訓練で何とかしていこうということなのかなと思います。

最後の非常に重いといえますか、なかなか自分の命を自分で守ることが難しい子たちも出てきていると。我々も、要援護者という言葉で、市民の方でもなかなか逃げられない方に対してどうするかという大きな課題を抱えていますけど、これも学校現場でもまさにそのとおりだと思いますし、子どもたちの中でも、そういう自分の命を自分で守れない子たちをいかに助けるかみたいな意識が芽生えてくるかどうかというところは重要な部分ですね。

【教育監兼学校支援課長】

普段の関係性をしっかり持って、この子は意識がある、ないというのは大きいところですので、本当の危機の場面だけではなくて、普段から意識をつくっていかなければいけない。

【防災指導監】

実を言うと、お話は厚労省管轄の状況で学童にかかわるお話だったんですが、学童に対してタウンウォッチングをやってくださいというところがありまして、実際そこに行って、桑名市の災害ってこんなですよという子どもバージョンで、実際に歩いてみたんです。そしたら、子どもが私のもものところを突きながら、これこれと言うわけなんですね。何かと思ったら、街路灯の下の部分が腐っていたんですね。

子どもの目線にない大人の目線と子どもの目線とあって、そこに危機感を感じるという、その危機感を持つことが子どもの教育の第一歩かなと周りを見ていて思うんですね。そこに神髄があったのかなという印象を一度持って、そういったような身の回りのことをちゃんと、先ほどもお話のあった、冷静に見るとはそういうことを言って、そこに危機感を持つかどうかといったところは重要な印象の1つかなというふうに感じたところです。

【市長】

大阪北部地震の後のブロック塀の点検の部分でも、おそらく今、指導監がおっしゃっていただいた分があるかと思いますが、ここが危ないかどうかを子どもたちが気づいているかどうかというのは非常に大事なことですよね。大人だけが、危ないよとか、危ないからこれを撤去しようということだけではなくて、まず自分たちが、これは危ないのではないかなということを感じられるかどうかという、そこでしょうね。それはどう指導するかですね、でもね。

【教育監兼学校支援課長】

指導監が今お話しされたみたいに、実際にやってみるとというのが。あと、時間確保の問題。例えば、おうちの方をお願いして、一度通学の途中で、親子で歩いてもらって、チェックしてもらって、それを持ち寄って、学校ではどんなことを見つけたかなということを出し合うとか、うまく時間を生み出しながらやっていくことをしながら。でも、実際にやっている、いないは大分違うと思いますので、うまく取り入れていく工夫をしていかなければいけないという気がします。

【市長】

体感させるというのは一番なんですよ。

【教育長】

今回のブロック塀の話ですが、あのときも、ちょうど時期が分団集会って、1学期の終わりですので、子どもたちにもできるだけ一緒に歩いてもらって、今、指導監がおっしゃったような形の子どもの目線で見たときの危なさとか、保護者と子どもたちと先生で多くの学校で歩いてもらったんです。その中で少し子どもたちからも出てきたところがあったので、本当に時間がないですけれども、そんなところを増やしていくことが、今までの分団集会で話だけではなくて、一度、通学路を歩いてみましょうとか、そんな機会をうまく設定していくことが大事なかなとは思っていますよね。

【市長】

教育現場の部分とかの生活の部分もうちょっとリンクしてこないかというか、してくることが大事だというふうに思いますし、学校だけに任しても結局だめで、親御さんとか地域の方も協力して、これは危ないのと違うとかか、子どもたちの目線に立って、いろんなリスクをちゃんと理解できるかということでしょうね。

この間、僕も、子どもと公園でサッカーをしていたら、すごいでかい石碑とかがありますよね。あれって危ないなと自分で思ったりして、そういうふうに見えるかどうかですよ、これは大事だけど大丈夫かとか、いろいろそういうのは、おそらくみんなが気にし始めると、防災の日常化ということがするのかなと思いますね。ありがとうございます。

次、佐藤委員、お願いします。

【佐藤委員】

防災環境のことで説明いただきまして、まさに私、個人的に、うちが桑名高校のすぐ近くにありまして、活断層の真上に建っている感じで、そういうこともあって、日ごろから家族で話す機会がございまして、そこでも子どもに伝えているのは、地震なりが起きた、発生したときに、どこにいるかによって、それぞれ避難が変わってくるかと思うけれども、一緒に家族で集まることで避難するということはないよと。だから、そこにいる場所で、そこにいる大人たちの指導を受けて避難をするよというふうに言っています。それが、いわゆる自分の命は自分で守るということかと思えます。

そういった面では、学校の役割って非常に大きいなというふうに思っています。親の立場からすると、学校の授業中に起きた場合は、子どもの安全は学校の教員の方に守っていただけるというふうな安心感があるので、そういった面では、非常に役割というのは大きいなと思います。学校の役割という面では、設備的なハード面もあると思いますけれども、ソフト面でも、実際に発生した子どもの心のケアであったりとか、発生後のどの期間まで学校が子どもを見ていただけるのかというのも非常に不安な要素ですので、そこら辺も解決できてはなというふうに思っています。

実際、自宅が崩壊した場合、どこに戻ればいいのかとか、子どもたちと一緒に、家族が。仮にですけど、親が不幸なことになった場合のケアだとか、そういった面も含めて考える必要があるかなというふうに思います。

ハード面のほうに関しては、学校だけでは解決できない部分もありまして、先日ちょっとお話があったんですけど、明正中学校のプールというのは、火災のときの消火に加えて、緊急医療時の消毒のための水の確保という面でプールを利用されているということなんですけど、その一方で、明正中学校のプールがこれから使用できなくなるので、一時的に水を供給してもらえないかといううちに話があったんですね。水を供給することは幾らでも構わないですと。ただ、災害が起きたときに、その水をどうやってくみ出すのかとか、誰がその立場にいて水を吸い上げるのかとか、そういった面で、いろいろ細かく詰めていくと、ハード面においても、学校の役割というか、施設の役割というのは大きいなというふうには思いました。

最後に、想定外という話なんですけど、子どもにとっては、地震とか津波というのは、なかなか想像しろと言っても想像できないんですね。よくあるのが、例えば危険予知行動とかというの、分析というのかな、ありまして、学校内でも、地震とかではなくて、この遊具で遊んでいたら、落下してけがをする可能性がありますよとか、そういう身近な行動の中で危険予知のトレーニングではないですけど、実践に取り入れていくと、わりと身近に取り入れられるのではないかなというふうには思います。

【市長】

ありがとうございます。

保護者であるところからもあると思いますけれども、子どもの視点に立って考えるというの、本当に考えておられるなということに改めて感心させていただきました。まず、家族でそういうふうにご話されていることがすばらしいことだというふうに思いましたし、そういう家庭が一軒でも増えることが本当に教育のほうからうまくつくってほしいなというふうに思います。

学校の役割についてということで、ソフト面についての特にケア、どこまで心のケアをするのか、そのあたりについては、学校と保健福祉の分野といいますか、医療の分野といいますか、そちらとしっかり連携をして対応していくことになると思いますし、長期戦になりますので、ここは非常に重要に考えていきたいなというふうに思います。

ハードの問題はなかなか大変で、今、ご案内いただいた明正中のプールも、非常に老朽化が激しくて、こんなはりが落ちたんですね、金属の。そこは、ビニールハウスみたいな覆ったプールになっているんですけども、このはりが落ちまして、腐食ですね、それで、これは危ないからと撤去しようということなんですけれども、水をどうするのかという課題もありますし、施設が老朽化をしてくれて、最近では学校の天井が落ちるとか、壁が剥がれるとか、本当に様々な、老朽化と地震の耐震化と違う話だったりするんですが、老朽化はかなり進んでしまっているというところの課題をどう解決するのかという大

きなものもありますので、水ということだけではなく、全体を捉まえてはいけないのかなというふうに感じました。

佐藤委員に伺いたいですけれども、会社、特に工場で、例えば従業員の方がおられるときに発災した場合とかって、BCPを立てられたりとか、訓練されたりというのがありますが、そのあたりで今気をつけておられることは何かありますか。

【佐藤委員】

基本的に、避難訓練は毎年やっています、それは従来どおりの基本的な避難通路の確認と、その後の1次避難場所、2次避難場所の指導というのはやっています。ただ、今回の話ではありませんけど、社員それぞれが最善を尽くして避難するよというふうに言っています。避難通路ですね。

【市長】

どうやって逃げるか。

【佐藤委員】

避難通路途中で落下物があって、それによる事故が発生するので、その点は注意していますね。

【市長】

あそこって、水もありますか。洪水も……。

【佐藤委員】

ありますね。

【市長】

員弁、町屋川からの分もありますし。そうすると、BCPというか、事業をいかに継続しているのかと。実際、事業を続けるといった部分は、経営陣側というんですかね、まずそっち人たちが考えをして、現場の人はもう少し後というような感じでしょうかね。まずは、従業員の皆さんもそれぞれ命を、身を守っていただいてというところからスタートということですね。ありがとうございます。

では、松岡委員、よろしくお願いします。

【松岡委員】

3点お話ししたいと思います。

1つ目は、東日本大震災を経験された、当時学校の先生をやっておられた方のお話を聞く機会がありまして、その方のお子さんも、先ほどの大川小学校に通っていて亡くなったと。そのお父さんは別の学校だったんですけれども、大きな地震が起こって、その後、おさまったときに、避難訓練どおりに行動しようと思って、これまでの避難訓練がほとんど役に立たなかったと。形式的にしかやっていなかったというのを身をもって知らされたという話でしたね。

それはどういうことかということ、ガラスがばりばりに割れているんだけど、想定してやっていたのは、学校の校舎のすぐ脇のところは避難通路になっていて、ガラスがばりばり割れているし、全部落ちていけばいいんだけど、まだひっかかっているのがあるから、余震があったらさらに落ちてくるから、とてもそこは避難経路に使えるということで、全然見えていなかったというお話と、もう一つは、先ほどちょっと出ていますけれども、整然とではなくて、むしろ子どもたちの目と気づきが役に立ったと。あそこはこうなっているから危ないと違いますかという、そういうふうなことでしたね。多分、先生が想定している範囲内のことであれば、整然と私語を慎んで避難しましょうでよかったんですけど、そうではなかったの、先生もよくわからない状況で、いろんな子どもたちの意見を聞きながら行動したのがよかったと、そんなようなお話でしたね。

どうなんですかね。桑名でも大きな地震があったときに、ガラスが割れるでしょうね。そのときに、3階から地震がおさまって逃げようとするときに、ちゃんと逃げられるのかなというあたりをリアルに考えながら、こういうことが起こるからこうしないといけないねという、そういうことを考えておかないといけないのではないかなと思いました。

それから、2つ目は、北海道の場合は広域停電が起きましたね。あそこまでは考えなくてよかったのかと思っても、実際起きましたからね。どれだけ広域かにもよりますけれども、そうすると、桑名

市内だけでも、電話や携帯が通じなくなりますし、だから、小学校は市役所とは連絡がとれない状態で、独自に行動しないといけないことになり、名古屋も停電するとすると、放送局がやられるので、テレビをつけても、ラジオをつけても聞こえない。BSは生きている可能性が高いですけども、BSが、停電の状態を受信できるのはかなり限られますよね。だから情報が無い。そういう状況で、学校にいるときに地震が起こったら、先生も、子どもたちも、大小のけがをするでしょうし、自分たちで判断して、安全に子どもたちを保護者のもとに帰すということを考えないといけないのかなと、そういうことですね。

それから、3点目は、学校運営協議会で出た話なんですけど、私は地元の学校運営協議会のメンバーで、この間の協議会で、たまたま防災の話がちょっと出まして、そこで、避難する人たちが体育館に行くんだけど、体育館で寒かったけれども、市役所の人々が着くまで、防災倉庫に毛布は入っているんですけど、市役所の人々が対応するので、勝手に防止倉庫をあけないでくださいと言われていて、やったことは、マットを出して、そこでいてくださいと。それは正しいのかなと、よくわからないんですけど。それと、体育館に避難した人たちは、まず情報がとりたいということで、テレビが見たいんだけど、テレビがないということですね。それでは何なのでということで、校長先生が気をきかせ、ラジオは準備したと、そんなような話でした。

あと、日ごろ使っていない設備、トイレも含めてですけど、そこはそんなに維持管理はしていないし、清掃も行き届いていなかった。しょうがないかなと思うんですけどね。体育館のトイレって限られていますよね。そこにたくさんの避難してきたから使えなくなっちゃうんですね。ということで、そこら辺の維持管理はどうするのかという話も出ました。この辺を思うと、学校から何が必要と。日ごろの学校の活動では必要ないんだけど、防災のときには必要だというものを学校で取りまとめて、要求して、そして維持管理をするというのはちょっと無理だと思うので、その辺は防災・危機管理課さんのほうで考えていただくといいのかなというのと、維持管理については、もしかするとまちづくり協議会ができたなら、その中で、自分たちのことだから、学校施設だけでも自分たちで日ごろの維持管理をしようかという話に持っていければいいのかなと、そんなようなお話が出ました。

以上です。

【市長】

ありがとうございます。

3. 11のときのお話からということで、形式的な訓練というのがなかなか役に立たないのではないかと。リアルにいろんなことを考えて、どこでガラスが割れるのかとか、そういうことを考えた対応ができるのかというのが非常に重要だというお話をいただきまして、何とかそれに向けてしっかりとした意味のある訓練にしてほしいなというふうに思います。まさに想定をしていなかった北海道でのブラックアウトについても考えていかなきゃいけないということでした。放送、通信網が断たれると、ある意味、学校は孤立してというか、教育委員会や人も直接は連絡できない中での対応になりますので、まさにそういうことが起こったとしても対応できるような現場でなきゃいけないということだと思います。

それから、3つ目の分が、松岡委員、まさに地域で活動いただいているからゆえのいろんな課題提案かなというふうに思いましたけれども、特に、21号、24号の際の話は、体育館はどうあるべきだというような、そういう議論もかなり地域からも出てきました。防災倉庫の部分は、うちの職員のオペレーションが違うような気もしますし、本来であれば、避難所については、地域の方々でうまく運営をしていただいているのが原則かなというふうに思いますので、そこは私のほうも改めて確認をしておきたいなというふうに思いますけれども。

体育館での本当に必要なものがないという課題があるなど。避難所なのに、トイレがきれいではないというものもありますけれども、様式のトイレがおそらくなくて、そこにおじいちゃん、おばあちゃんが来て、膝が悪いのになかなかトイレもできないとか、そんな課題もいただきましたし、情報の話も、テレビはないものですから、なかなか情報がとれないなという心配事もいただいたところでもあります。

ここは、我々も今課題として思っておりますので、教育の現場ということではない分もあるかなと思いますので、防災のほうとしっかりと話を進めていきたいなというふうに思っています。教育現場では必要ではないんだけど、災害発生時には必要だというのは、インフラを含めてかなりあるというふうに思いますので、それはしっかりと考えていきたいなというふうに思っています。

【松岡委員】

1つ言い忘れましたけど、台風は、そんなに暑い、寒い時期ではない、暑いときか、地震は真夏に起こることが多いので、そこで避難してきた者が、暑くて暑くて熱中症で亡くなったということも起こり得るし、冬は逆に寒いですね。そういうことも考えておかないといけないのかなと。体育館に冷暖房を入れるかというのは……。

【市長】

なかなかやはりね。全国的に、体育館の冷房設置が1.2%。我々は、今、小学校の普通教室もなかなか入れられなくて厳しい状況でもありまして。

【松岡委員】

スポットクーラーというのはあり得るかもしれないですね。

【市長】

この間、私は、経産省の方と意見交換をしたんですけども、何日間か耐えられれば、1週間後には、スポットクーラーが全部送れると言っていましたね。経産省のメーカーと直接取引している、担当している方が、国のほうの今プッシュ型搬送ということで、とにかくいろんな必要と思われる機材を地方が要る、要らないに限らず国がどんと送るという今仕組みになっていまして、そこで、今年もさまざまな、特に広島7月豪雨には、ダイキンさんとか、某つくられているメーカーの方から直接をそれを国が送るという仕組みでかなりできていると言っていました、あそこも、まさに最初の1週間が非常に厳しい暑さでして、非常につらかったというふうに伺っています。これは、学校で置くというよりも、民間と提携してそういうのを送ってもらうみたいなことはできるんですかね。

【防災指導監】

第一義的には、基本的に国に責任があるというふうに考えると、先ほどのプッシュ式で。民間さんと提携をしてというのは、現状難しいところがあるんですね。私も、国の業務計画をつくっているメンバーの1人ではあったんですけど、防衛省サイドの、今は、私が退官して以降、その状況はどんどん進んでいまして、先ほどのクーラーにかかわるところも、実を言うと、後から追求をして、ニーズに合わせて購入をして送り込むという格好ですね。それを平時の通常の状態から全部買って、どこかに置いておいて、いつでも対応できるようにしておけるというのは、財政上も、あるいは面積とか、いろんな確保する場所としても、なかなかこれは難しいところと思うんですね。いかに桑名市がこんな状況で困っているのを国に上げて、県に上げて、そこで対応していただくのをいかに早い時間でそのルートをつくっておくかというところが当面の目標になろうかというふうに思うところですね。

【市長】

現場と国のところをつなぐためのこの時間をいかに短縮するかみたいなことが非常に重要だというふうに思いますし、ここは、おそらく発災時の一番大きなギャップが出てくる場所の1つかなというふうに思いますので、住民の意識と実際にできていることのギャップが発生してくるのはこういう部分かなと思いますので、こういうところが少しでも埋められるように我々も頑張ってみようというふうに思います。ありがとうございます。

ほかに何かこれだけは最後言っておきたいみたいなことがもしございましたら。

【稲垣委員】

藤井さんに質問させてもらってもいいですか。

【市長】

どうぞ。

【稲垣委員】

いわゆる災害が起きたときに、多分、学校の管理職がしなければいけないことと、担任がしなければいけないことって微妙に違ってくると思うんですけども、特にインフラで、さっきみたいに放送がとまるとか、それぞれが現場で判断しなきゃいけないときに、管理職及び担任が気をつけなきゃいけないことがあれば教えていただきたいと思うんですけども。

【防災指導監】

実を言うと、各学校の先生の本質は、子どもたちをいかに早く教育の環境に戻すかというのが、要するに、授業計画が本質的な仕事なわけですね。それもタイミングによって、例えば発災して3日ぐらいまでの間に、子どもたちとか、学校に来る人たちをどういうふうに取り扱うかという部分は、施設管理者としての学校長さん、管理者の方々のご協力を得ながら。ところが、なかなか支援が少ないというときには、担任の先生等が、父兄等も入ってきてしまっているんで、一緒に協力をしてとか、千差ばらばらなんですね。

その環境で、もしも恵まれていて管理者さんだけで対応できる場合には、一例を挙げれば、星見ヶ丘小学校で人を受け入れられるような環境にある学校であれば、管理者さんが中心になるでしょうし、長島の各小学校でも、孤立的になってしまうといったときには、先生が来られるかどうかという問題もあるんですけども、その環境等、本来市の職員とか、あるいは地域の方々でやらなきゃいけないところに一部何かご支援をしていただくとか。その中身は、ボランティアの活動と同じような千差万別のお仕事になるかというふうに想像ができます。

【稲垣委員】

ありがとうございます。

【市長】

ここは非常に私たちも心配しているといいますか、発災したときに、学校の先生がやること、市役所の職員がやることとか、ルールはないというか、実際そこで、現場で対応するしかないんですよ。このときに、いかに地域の人たちが防災の意識が高いか低いかというのは結構でかくて、地域で何とかやりましょうというエリアもあれば、そこは行政と学校のほうで何とかしてくださいねみたいなところもあって、我々も職員を派遣するエリアエリアで、派遣した職員がやる仕事が違うんですね。これって結構大きいなというふうに思っています。

要は、学校の先生が学校の教育する現場になかなかとり着けないというか。それって、本来のやることではないというふうに思いますし、市役所でやる仕事を本来は職員がすべきなのに、避難所の運営だけずっとしていたら、それは本質的な部分ではないのかなというふうに思ったりしまして、これは非常に大きな課題かなというふうに思っています。

地域の方が、自分の命は自分で守るというのも大事ですけども、次は自分たちの地域の人たちみんな地域の人を守るというふうな、そういう意識をしっかりとっていただいて、俺らはここまでやるから、おまえらはここをやってくれみたいな、全部やってくださいみたいなことにならないエリアに桑名全体がなることが非常に重要なのかなというふうに思っています。

現場の話と防災教育の話は両方あって、なかなかそこはごっちゃになってしまうんです、ここで話をすると。でも、生徒の命を守るということ、教育現場でも頑張ってもらいたいと思いますし、我々も、命を守るような対応、体制をつくるようにしっかり頑張ってもらいたいなというふうに思っています。

ほかによろしいでしょうかね。

ありがとうございました。

では、これで本日の事項は終わりました。事務局から連絡事項は何かありますか。

【総務課長】

長時間にわたりご協議、ありがとうございました。次回の日程につきましては、また改めて調整をさせていただきますので、よろしくお願いたします。

【市長】

では、これで本日の事項は全て終わりました。

これもちまして、平成30年度第1回桑名市総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

— 了 —